

サードアルバム『絶体絶命』2022年7月17日リリース予定

『絶体絶命』曲順

1. 「神ながらたまちはへませ」
2. 「ある日 道の真ん中で」
3. 「南十字星」
4. 「みなさん天気は死にました」 (第三詩集『狂天慟地』より)
5. 「 フンドシ族ロック+世界フンドシ黙示録」
6. 「探すために生きてきた」
7. 「犬も歩けば棒に当たる」
8. 「北上」
9. 「時代」
10. 「夢にまで見た君ゆえに」
11. 「メコン」 (第三詩集『狂天慟地』より)
12. 「銀河鉄道の夜」
13. 「巡礼」

曲順コンセプト

今のウクライナ戦争など、世界情勢や気候変動による激しい環境破壊のことなどを考え、『絶体絶命』を1曲目「神ながらたまちはへませ」の祈りから入り、最後13曲目「巡礼」の祈りで閉じる。

1＝起：「神ながらたまちはへませ」から入り、次に悲しみに暮れる「悲嘆」を歌う「ある日 道の真ん中で」と「南十字星」を歌い、その3曲で、『絶体絶命』の中の悲嘆と祈りを表現する。

2＝承：その後、「みなさん 天気は死にました」の詩の朗読で、その悲嘆の背後にある絶体絶命の状況を説明し、その中で物狂い状態で「フンドシ族ロック+世界フンドシ黙示録」を歌い、そこにストレートな「探すために生きてきた」を続け、「犬も歩けば棒に当たる」のロック調3曲を続けるという配列とする。

3＝転：その後「北上」で、起承転結の「転」に入り、「時代」と「夢にまで見た君ゆえに」のバラード風の歌でまとめる。

4＝結：最後の「結」として、「希望」の垣間見える「メコン」「銀河鉄道の夜」にして、最後は「祈りの言葉さえ知らない祈り」を捧げて終る。

1, 「神ながらたまちはへませ」

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

岩陰より滲み出して来る 水を探して 夢を探して

向こう岸にる 向こう岸に渡る
夢を開いて 夢よ開けと
あはれあはれ はへ あはれあはれ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

なけなしの夢が壊れて 行く当てもなく流離う
尽十方未来際 尽十方未来際
夢を開いて 夢よ開けと
天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

祈りの言葉は死に絶えても 朝日の中で甦り咲く
尽十方未来際 尽十方未来際
夢を開いて 夢よ開けと
天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら

2, ある日 道の真ん中で

ある日道の真ん中で 突然涙が溢れて来て 支えきれずに崩折れていった
このまま僕は糸の切れた凧のように あてどなく荒野を彷徨い歩く
季節外れのはぐれ鳥のように 行方知らずの迷い鳥のように

いつまで経っても僕は君を忘れられないんだ
こんなことならいっそこの世から消えてしまいたいんだ
空を見上げて呪った 涙をごまかすように

ある日岬の突端で 突然高波が襲いかかり 逃げられず呑み込まれていった
このまま僕は逆巻く波の藻屑となって あてどなく海峡を流され沈む
季節知らずの迷い魚となって 行方不明のはぐれ魚となって

いつまでたっても僕は君を忘れられないんだ
こんなことならいっそこの世から消えてしまいたいんだ

海を見つめて呪った さよならを告げる代わりに

ある日どこかで 突然涙が溢れて来て どうしようもなく悲しみに包まれたなら
そのとき僕がこの世の果てから声をかぎりに 当てもなく君の名を呼んでいるのだ
命知らずの彷徨い人となって 行方知らずの外れ人となって

いつまでたっても僕は君を忘れられないんだ
だから僕はこの世から消えてしまったんだよ
だけどそれも終わりじゃない さよならなんかじゃない

いつまでたっても僕は 君を忘れられないんだ
だから僕はこの世から 消えてしまったんだよ
だけどそれも終わりじゃ ない
さよならなんかじゃ ない

3, 南十字星

南十字星 空に消えた 南十字星 空に溶けた
青い海は どこまで青く 青い空も どこまで蒼く
帰ってこない月日を 戻ってこないあなたを
探し回ってしく 手がかりさえも見えず
星の光を頼りに 失くした月日を探して
どうすることもできずに 消えてゆくのを待つのか
嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼

南十字星 海に消えた 南十字星 海に溶けた
青い空は どこまで蒼く 青い海も どこまで青い
戻って来ない月日と 帰って来ないあなたと
巡り合う日を探して 闇夜の中を歩く
月の光に照らされ 失くしたすべてを手放し
どうすることもできずに 祈りとともに待つだけ
嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼

4, みなさん天気は死にました (朗読・朗唱 鎌田東二第三詩集『狂天慟地』土曜美術社出版販売、2019年9月1日刊より)

「みなさん 天気は死にました」
と 高校三年生の田村君は 言った

その田村君は 生きているか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物

林檎よ

縁は異なるもの味なもの

そのとおりだが

でもね

死んだ天気も 縁次第

そのようになって そのようにある

あるべくして ある

なるべくして なる

世界はそのようにうごいている

縁はそのようにはたらいっている

1ミリ1センチたりとて恣意的ではない

成るべくして成る

在るべくして在る

ありおりはべりいまそかり

青森カルシウムはどこ行った？

臼田甚五郎は飛びのいた

大森から青森まで

その飛躍こそが猿楽芸能

天狗舞

マイトレーヤ

そは如是我聞

聴くべき耳を研いた

研磨研耳

いかつこなく

いかしまぐはひのごと

弘前に

花折れて立つ

やつかみみ

はしぬれど

ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った

恐山にて
津軽三味線の
音律たかあま
ぐひのみこと

だがされど
されど木島
みやこじま
いつまで封せど
ねこばばの
影落ち延びて
地に臥せり

やつがれは
しとど
ぬれて
大河の一滴まで
のみほした

ぬれおちど
ぷちそいど
れおなると
はれおから
ひとしづく
はれ ほれ
みれ おれ

行き場なし
溜り場なし
咲き場なし
馬場愛なし

そうだとすても
すべてをいれて
すべてをすてて
本日早々

みなさん 天気は 死にました！
みなさん 天気は 死にました！
みなさん 天気は 死にました～！

5, フンドシ族ロック・世界フンドシ黙示録

① <フンドシ族ロック>

おまえのフンドシ 赤フンか 空を飛んでゆけ
おれのフンドシ 青フンよ 海を越えてゆけ
いつまでたっても おれたちは
フンフンフン族 フンドシ族

おまえのフンドシ 金フンか ビルを抜けてゆけ
おれのフンドシ 白フンよ 巷を泳いでゆけ
自由を愛する おれたちは
フンフンフン族 フンドシ族

気が気でねえよ おれたちは ジリ貧民族
気が気でねえよ おれたちは ジリ貧民族 フンドシ族

言わずと知れた おれたちは フンフンフンドシ族
言挙げしないが おれたちは フンフンフンドシ族
この世の悪に 立ち向かう
フンフンフン族 フンドシ族

おれたちゃ 敵に立ち向かう パンツ・グローバリゼーション
世界にゃ 多様性が必要よ アンチ・ファンダメンタリズム
自由を愛する おれたちは
フンフンフン族 フンドシ族

誇りを持とうぜ おれたちは 尻賓民族
誇りを持とうぜ おれたちは 尻賓民族 フンドシ族

フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフンドシ族

② <世界フンドシ黙示録>

これはこの世の黙示録
これはこの世の黙示録
これはこの世の黙示録
これはこの世の黙示録

天地^{あめつち}の初め、世界の中心にフンドシがあった。
フンドシは一人で寂しかったので、人間を創った。
そして人間の^{またぐら}股座に巻きついて喜びの声を上げた。
僕にはいつも友だちがいる！ と。

天地の中頃、世界の中心に人間があった。
人間は大勢になってうるさくなったので、仲間を殺し始めた。
そして人間の代わりにたくさんのロボットを作っていた。
俺様は世界の王様だ！ と。

天地の終り、世界の中心にフンドシがあった。
フンドシは人間が見向きもしなくなったので、人間を滅ぼした。
そして一人天に戻っておいおいと号泣した。
僕はやっぱり独りぼっちだ！ と。

これはこの世の黙示録 これはこの世の黙示録
これはこの世の黙示録 これはこの世の黙示録
これはこの世の黙示録 これはこの世の黙示録
これはこの世の黙示録 これはこの世の黙示録

6、「探すために生きてきた」

探すために生きてきた 道を求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 果てしない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 切りがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 とめどない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 道がない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
時を求めて生きてきた 闇を潜って生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 切りがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 とめどない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 終わらない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
路を求めて生きてきた 夢を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 ときがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 あてがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 みちがない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 闇を潜って生きてきた 愛を求めて生きてきた
探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 闇を潜って生きてきた 愛を求めて生きてきた

7, 「犬も歩けば棒に当たる」

犬も歩けば棒に当たる 人も歩けば暴力に当たる
などてこの世は荒れ果てた などてこの世に雪が降る
水の行方を追いかけて 霞と消えた夜となる
祈りを凝らして月を見る たまふりむすびの月影よ おけ
おけ おけ おけ

嵐の晩に人を抱く 呆れるほどに火と燃えた
すべてあの世の星めぐり すべてあの世に肥担ぎ
君の面影追い求め 夢まぼろしの夜となる
人の情けに涙する 泉枯れても星の夢 おけ
おけ おけ おけ

8, 宮城県石巻市北上町釣石神社再建奉祝・鎮魂能舞「北上」2016年5月30日作詞作曲

(歌) 北上遙けく 滔滔と流る
海幸山幸 はじけるいのち
友と語らい 明日を夢見

今日の喜びを 常永久に

(語り) 平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、三陸沖から真っ黒な壁のような高浪が一举に北上川に押し寄せ、みるみるうちに、家々を、田畑を、山野を呑み込んでいった。

東の海の彼方から、巨大な妖怪のような真っ黒い塊が北上川を逆流し、見る見るうちに沿岸の集落を、家々を呑み込んでいった。避難指示を待って校庭に待機していた対岸の大川小学校の大勢の児童たちも呑み込まれていった。

赤い靴履いていた女の子 異人さんに連れられて行っちゃった

逆らうことのできない自然の振る舞いではあり、まさに自然とは、そのような自然の律動に従って動き、はたらき、現象するものではあるとはいえ、人間世界の暮らしに多大な被害と悲惨と痛みをもたらすことも歴史の事実であった。

およそ 1150 年前、貞観 11 年 (西暦 869 年) 旧暦 5 月 26 日、三陸沖で大地震が起こった。時の歴史書『日本三代実録』には、“流光が真昼のように照らし、人々は叫び声をあげて倒れ伏して起き上がることもできないほどだった。家の下敷きになって圧迫死する者や、割れた地面に埋もれる者が続出するありさまで、驚愕した牛馬は奔走し、城郭や倉庫や門や壁など倒壊建築の数も数えられない。海が雷のように吠え、盛り上がった高波が城下に押し寄せ、海から数十百里もあるところまで果てしないくらい波に呑まれ、原野であるか道路であるかもまったくわからず、船に乗る間も山に登る間もなかったので溺死者は 1000 人も出た。そして、家財も苗も、何も残らなかったほどの大災害であった”と記されている。

その貞観大地震に比するような大地震が平成 23 年 (西暦 2011 年) 3 月 11 日午後 2 時 46 分に起こったのだった。

嗚呼 無情なり 嗚呼 無常なり

この貞観大地震発生時の天皇は清和天皇、政務は、摂政太政大臣藤原良房が司っていた。本釣石神社の御祭神天児屋根命は、長く日本の政務を担当してきた撰関家の藤原氏・中臣氏の祖先神である。

南無阿弥陀仏 救いたまえ 神ながらたまちはへませ 助けたまえ

平成 28 年 6 月 19 日、東日本大震災から 5 年と 3 ヶ月、氏子崇敬者、また岐阜県南宮大社などの支援を受けて、宮城県石巻市北上町字追浜に鎮座する釣石神社の新社殿が竣工なり、かくも盛大に奉祝行事が営まれることになった。

その復興・再建を祈り祝う、奉祝のみ祭に際し、今ここに、京都市在住の観世流能楽師・河村博重師と不肖・鎌田東二が共に心を込め、魂を込めて、「鎮魂能舞 北上」を奉納申しあげるものである。

神ながら たまちはへませ 神ながら たまちはへませ

北上遙けく 滔滔と流る
この麗しき 山河海
心尽して みたまを悼み
亡くしたいのちを 忘るまじ

9, 時代

僕が君と出逢った時
一番星を見つけたような 心の奥に火が点ったような
どうすることもできない想いを おさえることのできない気持ちを
抱えて僕は 悦びに震えた

海はどこまでも広く遠くて
君はいつまでも深く透明で 行けども行けども 先は長くて
追いついてゆかない言葉が 唇の端からこぼれて落ちた
先回りして振りまいた笑顔も 行く先知らず戸惑っていた

時代が雷のように鳴り響いていた 時代が音を立てて崩れていた
そんな時代の中に 君も僕も そんな時代の中で 君と僕は

けれども君は去って行ってしまった
伸ばした手は何もつかめなかった 心の奥の火は消えることなく
どうすることもできない想いと おさえることのできない気持ちを
抱えて僕は 哀しみに昏れた

海を見ても 心は広がらない
風に吹かれても 心は開かない
瞬間記憶の断片だけが 走馬灯のように追いかけてくる
投げ出したくなる何もかも どうでもよいと捨て鉢になる
そんなうつろい時雨の中で さ迷った

時代が雷のように 鳴り響いていた 時代が音を立てて 崩れていた
時代が雷のように 鳴り響いていた 時代が音を立てて 崩れていた
そんな時代の中に 君も僕も そんな時代の中で 君と僕は
そんな時代の中に 君も僕も そんな時代の中で 君と僕は

そんな時代の中に 君も僕も そんな時代の中で 君と僕は

そんな時代の中に 君も僕も そんな時代の中で 君と僕は

10、「夢にまで見た君ゆえに」

夢にまで見た君ゆえに ひとつかみまでさくゆえに
祈りを込めて届けたい 心尽きるまで果たしたい
仰ぎ見る空と

嗚呼 嗚呼 嗚呼

夢の果てまで君探し この世の果てまで君恋し
届かぬ思いを見届けて いのち尽きても届けなむ
落ちて往く空へ

嗚呼 嗚呼 嗚呼

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなりにけり
嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼

夢の奥まで迷い来ぬ 風に吹かれてさ迷いぬ
どこまで行けども果てしない 祈りの果てまで身を投げて
飛び惑う夢よ

嗚呼 嗚呼 嗚呼

夢にまで見た君ゆえに ひとつかみまでさくゆえに
祈りを込めて届けたい 心尽きるまで果たしたい
仰ぎ見る空に

嗚呼 嗚呼 嗚呼

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなりにけり

嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼

11、メコン (朗読・朗唱 鎌田東二第三詩集『狂天慟地』土曜美術社出版販売、2019年9月1日刊より)

メコン

棚の上の骨壺を抱いて
夕焼けの散華の海に入る

人知れず葬りの蛾
矢板の上に意気消沈した雪だるまが
悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ
誰にも見られず
何人にも咎められず
靴下を履いたまま飛び込んだ
おまえの胸に
メコンよ

防ぎようもない空と
喘ぎ見るばかりの
おまえの喉元
ぬめりと流れてゆく舌先を
衝立は途絶えた

メコンよ
何というなつかしさの奥に
蜜蜂がつつき合って
互いを刺し殺す現場を
生まれたばかりの
二日月の生卵
割れぬまま呑み込んだ
おまえの度量

いくばかり
いかばかりかと
捨て石に訊く
死後の生存を

名ばかりの孤独に
唯名論者は躓く
明日を信じないくせに
明日を待ち望む偽善者よ

サンクトペテルブルグまで
日傘をさして
揺籃の扉
消え果てし秀妻
海鮮問屋の蛸と消ゆ
うつばりの夜汽車で

さあ ひらいて
おまえのまたを
ちのはてまでつづく
あめのやちまた

だが ちまたには季節外れの雪が降っていた
熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも
狂天慄地の風上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても
あめつちをつなぐ母なる河として
あなたは 流れつづける
この世の果てまで
地の涯てまでも

12, 銀河鉄道の夜

この地球から見ると銀河は白い乳の流れに見えて夜空を彩る
その夜 ケンタウルスの祭りではぼくは不思議な夢を見た
銀河の夜汽車に乗って星の世界を旅する夢だった

あの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しに行こう

カンパネルラの星までぼくは旅をする
カンパネルラの星からぼくは飛んでゆく

この宇宙の中で地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く
その夜 銀河の渦の中でぼくは孤独な星となる

いっしょに行こうと誓ったきみはどこにいるのか教えて 教えて

あの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しにゆこう

カンパネラ之星までぼくは旅をする
カンパネラ之星から独りで飛んでゆく

あの空の果てまで ぼくたちみんなで
まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう 探しにゆこう

13, 巡礼 ROMARIA (曲・原詞: Renato Teixeira、訳詞: 曾我部ゆかり)

描いた夢は はかなく消えゆく
ひとり悲しみを胸に歩いてる
照りつく陽射し、焼けつく大地
水も、草も、陽炎

祈りの言葉さえも 知らない私です
どうか神様私を導いて
心からの安らぎ ただそれだけを求め
たどりつくまでつづく巡礼

寄りそう心 叶わぬ希望
家族は遠い場所へと散っていった
母の流した、孤独な涙
愛も、救いも、幻

祈りの言葉さえも 知らない私です
どうか神様私を導いて
心からの安らぎ ただそれだけを求め
たどりつくまでつづく巡礼

声が聞こえる 導かれるままに
貧しくてもやすらぎみつげられると
知って欲しかった、私のまなざし
私の 私の まなざし

祈りの言葉さえも 知らない私です
どうか神様私を導いて
心からの安らぎ ただそれだけを求め
たどりつくまでつづく巡礼
心からの安らぎ ただそれだけを